

建築家増田清の経歴と広島における建築活動について

ARCHITECT KIYOSHI MASUDA'S HISTORY AND
HIS WORKS IN HIROSHIMA

石丸紀興*, 李 明**

Norioki ISHIMARU and Li MING

In this paper, a study on Mr. Kiyoshi Masuda, an architect, who had not ever been noticed, was made within the range of possibility, an investigation on his major architecture activities was done along with getting his career clear. Secondly, the relation of Mr. Kiyoshi Masuda with the design of the government office building of Hiroshima city was made clear, after clarifying his architecture activities in Hiroshima, especially analyzing the design process of the government office building of Hiroshima city. And then, the reason why Mr. Kiyoshi Masuda was specified to design the buildings built in Hiroshima, and those building are respective characteristics and common characteristics were made clear. That is to say, by considering the architecture activities of one architect, some activity in formations of the architects from the late Taisho period to the early Showa period in Japan, especially in Hiroshima, were introduced in this paper.

Keywords: Kiyoshi MASUDA, architect, modern architecture, Osaka,
Hiroshima, Hiroshima city hall

増田清、建築家、近代建築、大阪、広島、広島市庁舎

1、はじめに

増田清(明治21年・1888~昭和52年・1977)は、大正2年7月に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、大阪を拠点として大正末期から昭和初期にかけ建築家として旺盛な作品活動を行うとともに、鉄筋コンクリート構造などの学術分野においても幅広くその才能を発揮した人物である。彼の活動としては、大阪での幾つかの作品が比較的言及されている¹⁾。しかし、広島において市役所からの囑託を受けながら、昭和3年3月に竣工した広島市庁舎、同年7月に竣工した本川尋常小学校、また昭和4年3月に竣工した大正屋呉服店、さらに昭和6年4月に竣工した広島県農工銀行など広島でかなり重要な建物を設計する役割を果たしていたことについては、これまで全くといっていいほど知られていなかった存在であった。今回、戦前広島における建築家の活動とその役割に関する研究と調査を進めている過程で、増田清に関するいくつかの資料と情報が明らかになった。

増田清は戦前の広島における建築家活動の実態との関連から興味深い建築家であるだけでなく、その作品は戦前広島の近代建築を考える上でも重要な意味をもつ建築と思われる。なお、戦前の広島の建築は被爆によって大部分が廃虚になり、生き残っている建築は少ない。増田清が設計した旧大正屋呉服店などはいずれも現存、また

は一部保存されている²⁾し、周囲の建物と共に良好な都市環境を創りだしているが、現地では市街地再開発に当たってそれらに対する正確な情報を求めており、本稿はこのような動きに対応するものとしても重要である。

本稿では、増田清に関する諸文献と調査を通して³⁾、増田清の経歴を明らかにすると共に、広島における建築活動を中心に彼の建築活動を論じるものである。

2、増田清の経歴

まず、増田清(以下増田と略する場合あり)の経歴について検討してみたい。遺族の方からの情報によれば、増田清は明治21年9月9日福島県伊達郡桑折町生まれで、明治39年青森県立第一中学校の卒業という。そして東京大学工学部建築学科の同窓会組織である木葉会名簿によって、原籍が静岡県で、明治42年に第一高等学校卒業後に東京帝国大学工学部建築学科に入学し、大正2年7月に卒業したことがわかる⁴⁾。当時の卒論は英文で書かれており、増田は“Description on A Gentleman's Mansion”というテーマで、紳士の邸宅の設計について考察しており、建築の意匠的な面に興味を持っていたようであった。ただし、後述するように増田が大学時代に受けた強い影響は東京帝国大学工学部建築構造学専門の佐野利器教授

本論文は、1995年度日本建築学会中国支部研究会で報告した内容を枠組みとする具体的な研究の一稿である。また、本論文の一部は1996年度日本建築学会中国・九州支部研究会で報告している。

* 広島大学工学部建築計画学 教授・工博

** 広島大学大学院工学研究科 博士課程後期・工修

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Hiroshima University, Dr. Eng. Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hiroshima University, M. Eng.

からであり、構造的な関心も強かったと言ふべきであろう。

増田は大学卒業後、安藤組大阪支店に勤務した後、恩師佐野利器の指導の下に内務大臣官邸の設計に従事し、大正8年10月に建築技師として大阪府土木課に入り、府立医科大学の大学病院焼失に伴う病院再建のために府直轄の大阪医科大学建築事務所（大阪大学医学部付属病院の前身）で設計の仕事に携わった。大正8年には府立大阪医科大学建築事務所長を命じられていた。日本建築協会の会員名簿の最初に出てくるのは、大正9年版（1920年12月25日発行）で所屬と住所が「大阪医科大学建築事務所、奈良市小西町4」となっている⁵⁾。そして大正13年の名簿で「増田清建築事務所主⁶⁾」となっており、設計事務所を開設したことが分かる。事務所は大阪市東区瓦町の山口ビルディング（現在の三和ビルディングの位置であるが最近改築された）に置いていた。

増田の所屬を公刊物によって確認できるのは、日本建築学会編「近代日本建築学発達史」であり、その中で坂本勝比古他による「関西における建築家の職能⁷⁾」と「付図・関西における建築家を巡る系譜」であり、特に付図によれば増田清を官公庁管轄欄の大阪府建築課、管轄課の枠に「増田清 (T.2) 東大」とし、大正13年のところで民間建築設計事務所欄に移行させて建築設計事務所を開設したことを示している。大正14年6月24日から昭和3年3月31日にかけては広島市から土木課建築事務を委託された身分でもあったが、活動拠点は大阪であったと推定される。

表1¹⁾ 増田清の経歴

年号	年	事
明治21年9月9日		福島県伊達郡松崎町生まれ、原籍は徳島県小笠原郡須賀町4丁目松崎地
明治39年3月	17	府立第一中学校卒業
明治43年3月	20	第一高等学校卒業
大正2年7月10日	24	東京帝国大学建築学科卒業
大正2年	24	安藤組大阪支店勤務
大正3年	25	佐野利器指導の下で内務大臣官邸の設計に従事
大正5年10月6日	29	建築技師（大阪府土木課）、府立大阪医科大学建築事務所所屬
大正8年	30	大阪府より管轄大阪医科大学建築事務所長・建築技師の辞令を受ける
大正12年6月15日	34	大阪府より府立大阪医科大学建築事務所長の辞令を受ける
大正13年3月7日	35	依頼先官（大阪府技師）
大正13年4月1日	35	増田建築事務所を大阪市東区瓦町4丁目55山口ビルディング内に設ける
大正14年6月24日	36	広島市から「土木課建築事務を委託す、年報酬三千円給与」という辞令を受ける
昭和3年3月31日	40	広島市から「土木課建築事務を委託増田清、増田清に付託を請く」という辞令を受く
昭和7年1月17日	43	京都市の和田病院より病院設計の感謝状を受ける
昭和10年9月	46	増田建築事務所開設。上京し安藤組の取締役技師長（これより3、4年前から安藤組へ手伝い）。
昭和16年2月	52	(社) 海軍施設協力会常務理事として出向
昭和17年3月	53	(社) 海軍施設協力会常務理事として出向
昭和23年頃	59	安藤組退社
昭和24年5月16日	60	全国建設業協会より「調査及び編輯の業務を委託す」の辞令を受ける
昭和34年頃	70	増田建築事務所再開
昭和41年4月9日	77	日本建築学会より感謝状と終身会員の称号を受ける
昭和52年2月9日	86	逝去

このように大阪を拠点として、広島においても設計活動を展開した増田清であったが、昭和10年前後に東京に移住し、その頃から安藤組に所屬した。増田建築事務所は昭和10年頃まで維持されたがそれ以降閉鎖された模様である。日本建築協会の名簿では昭和9年まで在籍しているが昭和10年以降は見当たらない。日本建築学会会員名簿や木曜会名簿によれば、既に昭和9年版で安藤組所屬と

なっており、昭和11年版では安藤組取締役技師長（木曜会名簿では「技師長」のみ）となっている。その後もしばらく名簿上は安藤組ままであるが、安藤組から出向の形で昭和17年頃より「(社団法人) 軍艦協力会」や「(社団法人) 海軍施設協力会」に関わり、軍艦では常務理事の肩書きが残っている。まさに太平洋戦争の影響が色濃く及んできたので増田はこの機会を利用して「軍の施設促進のために全国を巡り、後のジョイント・ベンチャーの先駆をつけた」と略歴に記述している。戦後しばらくして安藤組は停年退社した後、昭和24年5月18日付で全国建設業協会勤務となっており、その辞令には「調査及び編輯の業務を委託する」となっている。そこを昭和36年頃に退職したと推測される。そして昭和37年頃より設計事務所を再開し、いくつかの建物を設計している。

昭和41年に日本建築学会終身会員とされ、学会から感謝状を授与された。昭和52年2月9日逝去となっている。以上により増田清の経歴概略をまとめたのが表1である。

3、増田清の主要な建築活動

増田清の建築活動を見るために設計した建物リストと発表した論文等を見てみよう。建物リストについては、増田自身が書き残しているものを中心としていくつか補足し、戦後の建築事務所再開後の設計活動¹⁾を除いて作成するならば表2、また雑誌「建築と社会」に発表した論文・報告リストは表3のようになる。

このように増田が多く建物の設計に関係していたことが明らかになった¹⁾。これらの内、大阪市立精華小学校、三木楽器店、和田病院、旧奈良電気鉄道株式会社、旧女子医科専門学校・同校寮、女子医科大学一号館、女子医科大学臨床講堂については、日本建築学会編「日本近代建築総覧」(技法堂出版)に掲載され、精華小学校、三木楽器店、和田病院は近代建築画譜刊行会編・出版「近代建築画譜近畿編」に、また、女子医科大学関連の建物は「建築の東京」に掲載され、それ以上に注目された建物であった。

これらの内で現存する建物のいくつかに慣れてみよう。まず、三木楽器店（本店ビル）は大阪船場の心齋橋筋に鉄筋コンクリート4階建て・地価1階の建物として設計され、池田組が施行して大正13年11月に竣工したものであった。正面玄関の扉上部にはカラフルなステンドグラスがはめられ、外壁はタイル貼られ、窓と窓の間の腰壁には約30枚のレリーフタイルがはめられ、1階ピアノ売場の柱にはイタリア製といわれる鳥の形をした彫刻の照明器具が備え付けている。平成元年6月に外壁タイルの一部をそのまま残して信楽で焼いた淡いピンクのタイルに張り替えるなど、改修・保存工事が施されて話題を呼んだ建物である。窓を比較的に細かく区切る大正建築としての特徴を示し、内部は梁・ハンチなどを露出させた床天井で、構造的な力さと素朴性を表現しようという試みが見える¹⁾。

もう一つは大阪難波の繁華街の真っ直中に建てられた大阪市立精華尋常小学校(写真1)である。松村組による施行で昭和4年11月竣工し、翌年7月7日に落成した鉄筋コンクリート4階建て・地下付き、屋内運動場を付置し、エレベーター2基を備えた近代的な小学校であった¹⁾。この時期大阪市では多くの鉄筋コンクリート造小学校が建設されているが、川島智生によれば昭和2年の学区制廃止の動きがその背景にあったという¹⁾。精華小学校には、柱と梁をハンチで繋いでラーメン構造を頑丈に組み、地下の廊下にはガラ

スブロックを埋め込んで明かりを採り、講堂の大空間を鉄筋コンクリート造で覆うなど、いくつかの工夫をしている。このような増田の設計に注目するのが明治建築研究会の柴田正己である¹⁴⁾。柴田は精華小学校講堂については「曲線が美しい」と表現している。

表2¹⁵⁾ 増田清(建築事務所)の作品リスト

竣工(設計)年	所在地	建物名称	構造
大正6(設計)	大阪市	大阪府立医科大学病院	RC
大正7(設計)	大阪市	産業貯蓄銀行支店	RC
大正8(設計)	大阪市	高州児科病院	RC
大正9(設計)	大阪市	生野中学校	RC
大正9	大阪市	飛騨警察署(現浪速警察署に合併)	RC2
大正10(設計)	大阪市	育英女子高等小学校	RC
大正10(設計)	大阪市	豊崎第5尋常小学校	RC
大正11(設計)	大阪市	難波新川尋常小学校	RC
大正11(設計)	大阪市	敷津尋常高等小学校	RC
大正11(設計)	大阪市	芦池尋常小学校	RC
大正11(設計)	大阪市	明浄高等女学校	RC
大正11(設計)	京都市	鶴岡病院	RC
大正11(設計)	奈良市	関西製氷株式会社倉庫	RC
大正11(設計)	奈良県五條町	栗山邸倉庫	RC
大正11(設計)	京都市	顕道会館	RC
大正12(設計)	大阪市	芦原尋常小学校	RC
大正12(設計)	大阪市	今宮第三尋常小学校	RC
大正12(設計)	大阪市	相愛高等女学校	RC
大正12(設計)	呉市	呉市五番町尋常小学校	RC
大正12(設計)	加古川市	加古川病院	RC
大正13	大阪市	三木楽器店	RC4
大正13	大阪市	瀬美尋常小学校	RC3
大正13(設計)	奈良県郡山町	郡山尋常高等小学校	RC
大正13(設計)	大阪市	天王寺第一尋常小学校	RC
大正13(設計)	大阪市	恵美第二尋常小学校	RC
大正13(設計)	大阪市	恵美第三尋常小学校	RC
大正13(設計)	呉市	呉市立中学校	RC
大正13(設計)	京都市	東京女子医学専門学校	RC
大正13(設計)	京都市	日本大学工学部医学部	RC
大正13(設計)	奈良県群山市	奈良県立群山中学校	RC
大正13(設計)	大阪市	加藤商店	RC
大正13(設計)	兵庫県	小澤博士邸	RC
大正13(設計)	大阪市	桜川ビルディング	RC
大正13(設計)	大阪市	三好硝子店	RC
大正14(設計)	広島市	本川尋常高等小学校	RC3
大正14(設計)	京都市	竜谷大学	RC
大正14(設計)	大阪市	東平野第一尋常高等小学校	RC
大正14(設計)	兵庫県洲本	三島療病院	RC
大正14(設計)	京都市	吉井病院	RC
大正14(設計)	奈良市	奈良勸工場	RC
大正14(設計)	奈良県桜井町	桜井警察署	RC
大正14(設計)	大阪市	日刊工業新聞社	RC
大正15	東京都	通産省地質調査所東京分室(旧女子医学専門学校・同校寮)	RC4
昭和2	大阪市	大阪市立天王寺第5小学校	RC3
昭和3	広島市	広島市役所	RC3
昭和3	京都市	旧奈良電気鉄道(株)本社事務所	RC4
昭和4	大阪市	大阪市立精華小学校	RC4
昭和4	大阪市	大阪市立金瓶小学校	RC3
昭和4	広島市	大正屋呉服店	RC3
昭和5	東京都	東京女子医科大学附属病院1号館(女子医科専門学校)	RC5
昭和5	東京都	東京女子医科大学附属病院臨床講堂(同上)	RC5
昭和5	大阪市	大阪南陽演舞場(現国際劇場)	RC2
昭和6	広島市	広島県農工銀行	RC4
昭和7	京都市	和田病院	RC3
不詳	奈良市	国鉄奈良駅操車場(現JR奈良駅操車場)	RC3
不詳30年代	大阪市	山中ビル	RC3
不詳	大阪市	淀鏡馬場	RC
不詳	京都市	帝国女子医学専門学校(現東邦大学)	RC

大阪天王寺通天閣近くにある旧大阪南陽演舞場(現在の国際劇場)も増田の設計である。昭和5年竣工の旧大阪南陽演舞場は現在も国際劇場として機能している。柴田は「外観のバルコニー付の開口部・アーチ窓・スクラッチタイルの使い方などに建築家・増田清の特徴がよく出ている。」と記述している。一方海野弘は増田清に

着目したというのではなく、その建物の雰囲気注目して、「1950年、映画館に改装されているがアール・デコの気分を、丸窓の格子や波形の装飾帯に残している。」と述べている¹⁴⁾。海野は他に増田の設計した山中ビルについても「非常に装飾の面白い建築である。入口の上のアーチの飾り、階段室の細長い窓を囲む飾り縁と、その下の半円状の手摺りなど、スパニッシュ・スタイルである。」と評価し、「アカデミックな建築ではないので…」「山中ビルのように楽しい建物は、これまであまり建築史で取りあげられたことはなかった。」「山中ビルのように装飾的な建築は、折衷的だとして、ずっと評判が悪かった。」と建物の装飾的面を評価している。柴田は、このような増田を「戦前活躍しながら忘れられていた名建築家・増田清」、「鉄筋コンクリート構造の設計に優れた才能を発揮」、「合理的な力の流れを考慮した構造美のようなものが多い」と指摘し、増田の建物の合理性と構造美を評価している。

つまり増田の諸作品活動を考察すると、①大組織の設計事務所ではなく(脚注7を参照)極めて多くの建物を設計したということ、②それら全てが鉄筋コンクリート造という特色を有していること、③そして全般的に極めて頑丈で耐震的な設計に配慮されていること、④鉄筋コンクリートで無梁板構造を試みたり大きなアーチ空間を創出したり構造的な試みをしていること、⑤設計のみならず鉄筋コンクリートの施工に細かな配慮を示していること、⑥構造的な配慮ばかりしていたのではなくポイントになるところには装飾も施しデザイン的な工夫をこらそうとした跡を読み取ることができる。時には外部意匠にアール・デコ様式を導入している。⑦このような増田清が建築家として強く記憶されなかった理由は、佐野利器の系列の建築技術者として見られデザイナーから敬遠されたのではないかという仮説と、装飾やデザインがやや折衷的通俗的と評価されたものではないかという仮説が成り立つと考えられるが、真相は不明である。

以上のように、増田は作品活動を展開する、一方学術面でも、「建築と社会」に一時期、論文・報告を多く発表している(表3を参照)。内容的に見れば、鉄筋コンクリートに関連しては打ち継ぎ箇所の問題、鉄筋の位置、即ち配筋の問題、コンクリートと鉄筋のボンド、即ち接着の問題、コンクリートの練り方の問題などである。その他丹後地震の調査結果を報告したり、小住宅の耐震構造について説明したり、アメリカにおける銀行建築の建築計画的な考察したりして等、極めて啓蒙的な姿勢を示している。その他増田は昭和2年10月から月刊誌「建築知識」を主催発行し、鉄筋コンクリート造の普及を啓蒙したと言われる。そして、著作に昭和17年日刊土木建築新聞部で発行した「大空にとどくまで摩天楼のロマンス」である。

表3 増田清が「建築と社会」に発表した論文・報告リスト

題名	掲載欄・号(年号)
鉄筋コンクリート其の日その日(一)	5輯1号(大正11年)
鉄筋コンクリート其の日その日(二)	5輯2号(大正11年)
鉄筋コンクリート其の日その日(三)	5輯3号(大正11年)
鉄筋コンクリート其の日その日(四)	5輯4号(大正11年)
鉄筋コンクリート其の日その日(五)	5輯5号(大正11年)
鉄筋コンクリート其の日その日(六)	5輯8号(大正11年)
建築施工腐蝕	6輯1号(大正12年)
建築設計における強度計算報酬規定に就いて	7輯11号(大正13年)
ビルディングの構造とプランニングに就いて	9輯1号(大正15年)
丹後地方震災の実地を踏査して	10輯4号(昭和2年)
震度という言葉について	10輯7号(昭和2年)
小住宅にも必要なる耐震構造の心得	12輯5号(昭和4年)
米国の銀行建築	13輯12号(昭和5年)

4、増田清の広島における建築活動

以上では増田の経歴と諸活動について考察をした。以下からは増田清の特に広島における建築活動に焦点を当てて考察する。

表4 広島市庁舎関連及び増田清と広島との関係年表

大正14年1月	増田が内務省に提出した「御願」の中に本川尋常高等小学校設計中とある。
大正14年3月24日	広島市役所より増田に「土木建築事務所を委託す、年報酬三千円給与」の指令を受く。
大正15年1月14日	中国新聞「広島市庁舎の、設計費へ成る、新たに水道課も併設する、明年三月に完成予定」の記事には市庁舎の変換設計は大須市増田清工学士の手によって更に設計中と報道されている。
大正15年3月16日	中国新聞「建築設計できた、新広島市庁舎、五月起工費十月竣工、総費五十八万円」の記事には広島市庁舎建築設計は増田工学士によって今回完成したと報道されている。
大正15年3月1日	広島市役所竣工。鴻池組社史によれば設計管理は増田建築事務所とある。
昭和3年3月26日	広島市役所竣工。
昭和3年3月31日	広島市役所より「土木建築事務所委託増田清用済に付委託を解く」との指令を受く。
昭和3年4月14日	広島市庁舎竣工式。工事担当者鴻池組に感謝状。
昭和3年5月10日	大正屋呉服店竣工。清水組の工事竣工報告書によれば設計者「増田建築事務所」とある。
明治37年7月	本川尋常高等小学校竣工。
昭和3年3月20日	大正屋呉服店竣工、引渡。
昭和5年1月	広島県農工銀行本店竣工。
昭和5年12月1日	日本建築協会名簿(昭和5年版)によれば前内文二郎が増田建築事務所所長と合わせて「広島県農工銀行新築、広島市上初川町農工銀行新築」の住所表示がある。
昭和3年7月10日	広島県農工銀行本店竣工、増田は株式会社広島県農工銀行よりその設計に関しての感謝状を受く。

4-1 増田と広島との関わり

広島で増田清、或いは増田建築事務所が関わった建物、作品は何か、その根拠と合わせて提示しよう。広島市庁舎関連及び増田清と広島との関係を年表にまとめたのが表4である。

大正14年6月現在での増田清が内務省に提出した「御願」¹⁾が残されており、そのリストの確度は高いのでそれを根拠にするならば、増田が広島周辺を含めて最初に設計を手かけたのは、大正12年設計の呉市立五番町尋常小学校(現在の五番町小学校)、大正13年呉市立中学校(現在の呉宮原高校)、次いで大正14年に設計中の広島本川尋常高等小学校である²⁾。従って、増田が広島と関わるきっかけは、まず呉における建築設計であり、続いて広島での本川小学校の設計となった。次に増田が設計したことが確実な建物は、大正屋呉服店(現在の広島市レストハウス)の「工事竣工報告書」の設計者欄に「増田建築事務所」と記載されていることから導くことができる。同報告書は清水組が建築工事の関連項目毎に記入していた1枚の報告書であるが、よく保存されていて信頼性も高く、大正屋呉服店の設計は増田建築事務所と断定して間違いない³⁾。また、広島県農工銀行本店(後の日本勧業銀行広島支店)は当時の絵巻書において取り上げられ、その絵巻書の裏面に建築概要が記載されていて「設計監督 工学士増田清」となっている。さらに、表3で見た「建築と社会」に掲載された増田著「米国の銀行建築」の文中に広島県農工銀行平面図を増田建築事務所設計として挿入していることも裏付けになる。

他に大正9年に竣工した帝人広島工場と、大正14年竣工の帝人岩国工場もそれぞれ増田が関係したような記述が残されている⁴⁾が、本稿ではこの件に関しては否定的な見解をとることとする。

4-2 広島市庁舎の設計経緯

以上3件の建物を増田が設計したと確定して良いが、問題は広島市庁舎の設計である。広島市役所については「鴻池組社史」によれ

ば「設計は増田建築事務所が担当」とあり、(社)東京建築協会編「主要建造物年表¹⁾」によれば「広島市庁舎の設計監理: 益田建築事務所」となっている。ただし、後者も鴻池組から提出された資料をもとに編纂されたのであるから、鴻池組関係以外から広島市庁舎が増田の設計であることを傍証されていないことになる。竣工した際に発行された絵巻書に付された「広島市庁舎新築工事概要」に、18,997 余円もの設計管理費及び雑費を要したとされているのに設計者の名前の記事がなく、増田が設計したことに疑問符がつくのである。

実は広島市庁舎の設計に関しては、順調にことが運んだわけではなかった。やや横道に逸れるがこの問題について触れておこう。中島新町にあった市庁舎を移転改築する必要はあることは誰も認めることであったが、いざ移転改築計画を進めるとなると議論は紛糾した。大正10年11月4日付芸備日々新聞では「百八十万で市庁舎新築」という見出しで、「…既に土木課において設計中なるが今其概要を固くに総坪数一千坪鉄筋コンクリートの四階建(地下室を添えて)にして…」と報道しており、この段階で既に設計がある程度進んでいることが分かるが、設計者などは明らかでない。次いで第13代市長の佐藤信安が選任されて就任するのは大正11年4月17日で、大正13年4月になると市議会に新築費予算も上程され審議が始まるが、議会でも新聞紙上でも改築調査委員会の手続き問題、設計者の選び方や設計料の問題、移転改築費の高額問題などが激しく追及される。同年4月15日の市議会議事録によれば佐藤市長は設計士として池田工学士、大森、渡辺の3人の名前を候補に挙げ、結果的には池田工学士に依頼して設計中と述べている²⁾。池田とは後に新聞紙上を賑わすことになる池田稔(東京帝国大学建築学科明治35年卒)であるが、市議会の追及は設計者と市長とが個人的関係があるのではないかという点であり、この段階では追及をかわして設計者の件は承認を待たせようとした。ところが、池田がそのまま設計を続行することを不可能にさせる新たな事態が生じてくる。佐藤市長が辞任に追い込まれたのである。直接的な原因は大正13年7月27日付芸備日々新聞そのものが繰り広げた佐藤市長批判であり、これを市長側が筆禍事件として告発し、そのことが結果的には市長の立場が不利になって同年12月27日に辞表の提出となったのである。市長批判の論点はいくつかあるが、その1つがこの市庁舎設計問題であり、特に市庁舎の設計者問題が攻撃材料となり、市長が上京の際、池田と飲食を共にしたことが疑惑を招いた³⁾。こうして市長が辞任し市庁舎建設そのものも見送りになり、本格的に新市庁舎の設計・建設が進められるのは、川淵市長が就任しての大正14年からであり、昭和3月3日には竣工して、通常は川淵市長が「現市庁舎の生みの親」と解されている。

4-3 増田清による市庁舎の設計経緯

このような中から最終的に増田清設計に落ち着くのはどのような経緯であったのであろうか。ここで注目すべき考え方として、大正14年4月15日の広島市会遠記録によれば「斯様な大建築をするにはその設計は懸賞募集に依るのが一番宜しい。」という発言があり、いわゆる設計コンペ方式の提案がなされたのである。これは市長批判のための方策とも織られる発言であるが、市当局側の「工事費の安い人」「池田工学士が安い」という設計者の選任の理由よりは、充分に説得力のある方法であろう。

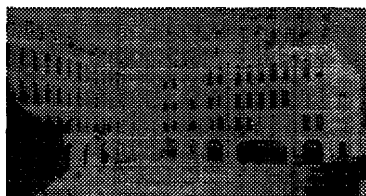
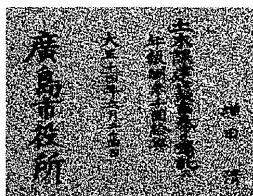
実際には、池田がそのまま設計を続行することを不可能にさせる事態、佐藤市長の辞任となるのであるが、少なくとも池田稔が市庁舎設計をある段階まで進めていたことを確認しておかねばならない。そして設計者として登場するのが増田清である。それを決定的に裏付けるのが大正15年1月14日付中国新聞と同年3月18日付中国新聞である（それぞれ資料1, 2）。

資料1: 大正15年1月14日付中国新聞「広島市庁舎の、設計委へ成る、新たに水道課も併設する、明年三月に完成予定」の記事内容:

「広島市庁舎の改築に就いては佐藤前市長に依って設計が完成し現在の市立高等女学校敷地建設される運びとなっているが当時の設計は刺りに華美に流れて嫌いがあると云うので設計を変更することになり大阪市増田清工学士の手に依って更に設計中今回完成したので十四日増田工学士来広して建築の下相談をすることになって居る。従前の設計は経費五十九万三千円を基礎としたものであるが更に千坪を要する水道課も併設することとなって居るので市庁舎全完成までには少なくとも六十五万円を要し工事には二月の予算市会過ぎて三月中に完成する計画であること。」

資料2: 大正15年3月18日付中国新聞「建築設計できた、新広島市庁舎、五月起工翌十月竣工、経費五十八万円」の記事内容:

「広島市庁舎建築設計は大阪市増田工学士の手に依って今回完成したので4月早々現在の市立高等女学校の整理を行い五月上旬から工事に着手する運びとなって居るが新市庁舎の建坪は約六百坪で建坪総延坪は二千七百坪となって居るが経費は五十八万円、明年十月完成する見込みである。なお現在分離して居る水道課も倉庫のみを残して併置する事となって居る。」



資料3 広島市から増田に交付された辞令書 **写真1** 大阪市立精華小学校

これらによれば、①既に佐藤前市長時代に設計が完成していたということ、②それを設計変更したということ、③新たに大阪市の増田工学士が担当したということ、④新たな設計条件も加わっているということ、等がわかる。このように新聞に建物の設計者名が出ることも自体極めて稀なことである。それが二度にわたって報じられたのであるから、当時市庁舎の設計問題あるいは設計者問題への関心が強かったことを伺わせる。

設計者が池田稔から増田清に変更された経緯や理由を直接明らかにするものは見当たらないが、池田設計案に対する捉え方或いは批判、増田設計案がどのような変更を行ったかという内容、などからみていきたい。まず、池田設計案はどのようなものであったろうか。市議事録や芸備日々新聞の署名記事によれば、①二千五百四十坪という大規模なものであり、②「地下室共六階建ての高層不便なる構造」、③「贅沢三昧を極めて居るものもある」、④「斯の如き宛然大料亭若くは大娯楽場に等しき構造」、等と表現されている。一方、増田設計案への変更内容は、①池田設計案が余りに華美に流れていた嫌いがあることからの変更、②水道課を併設することからの規模変更と合わせて建築費の変更、③市立高等女学校敷地跡地に本決まりしたことによる具体化、等である。

増田は大正14年6月現在、竣工は市庁舎よりも後の昭和3年7月の広島市本川尋常高等小学校を設計中であり、市庁舎の設計着手時点で広島市と関係があった。増田は広島市役所から交付された辞令が残っている。大正14年6月24日付で「増田清、土木課建築事務を嘱託す、年報酬三千円給与、広島市役所」（資料3）とある。そして昭和3年3月31日付辞令で「土木課建築事務嘱託増田清、用済に付嘱託を解く、広島市役所」となっている。このように増田は広島市から年俸3千円給与され、広島市庁舎竣工の直後まで2年

9ヶ月間嘱託の身分であった。その嘱託の期間は、市庁舎の設計と監理の時期にちょうど重なるといえ、設計料・監理料の額は不明であるが、市庁舎の設計変更において大きな役割を果たし、結果的に増田の設計としての特徴も表現したことであろう。

5、広島における作品活動の主要な傾向

5-1 増田清設計の三つの建物

次に増田が設計した建物について、それぞれ或いは共通する主要な傾向やデザインの特徴について考察してみよう。

本川尋常高等小学校: 先ず、昭和3年7月に竣工した本川小学校についてみれば（写真2）、大正13年6月14日に竣工した広島光道学校と共に県下でも最初期の鉄筋コンクリート造3階建ての小学校であった。校舎はL字型に折れ曲がったブロックプランで、隅の所に北入口とホール、靴脱ぎ場があり、そこから直階段で降りた地下には下足直場や浄化槽、ドライエリアがあった。また2・3階からのダストシュートも設けられていた。1階部分の開口部にアーチを連続させ、特に西面に張り出した正面玄関にもアーチを取り入れて建物の特徴づけた。全体的にモダンな印象を当時の市民に与え、竣工時には写真入りで新聞で紹介されている。

大正屋呉服店: 昭和4年3月、大阪に本店を持つ大正屋呉服店は広島中島本町に新築移転する。瓦屋根の木造2階建てが続く町並みにあって、鉄筋コンクリート造のモダンな呉服店はまさに常識破り、極めて革新的な建物だった（写真3, 4, 5）。目新しさは、構造だけにとどまらず、内部の売場も履き物のまま上がれるようになっており、ショーウィンドーのある1階と2, 3階も売場となっており、屋上に上がると市内が一望できたという。建物は元安橋よりの角地に位置し、コーナーに玄関が取られ、1階のアーチ窓と2, 3階部分は曲面上の方立てによる縦長の窓を連続させ、角の上部は丸めて塔状に見せてアクセントを付けるという、後に佐藤功一らがよく用いた手法で街区建築の一つの在り方を示していた。内部は床スラブと梁を露出させ、ハンチを設けて柱と梁をつなぎ、構造のみならず力強さも表現していた。窓の上部、下部などの外壁、まぐさ、窓台部分、或いはパラベット部分にはスクラッチタイルを貼り、仕上げを変えている等の工夫が見られる。



写真2 本川尋常高等小学校(1935年頃)



写真3 大正屋呉服店(1929年頃)



写真4 大正屋呉服店事務室内部(同右)



写真5 同左1階の売場内部(1929年)

広島県農工銀行: 昭和6年4月竣工された農工銀行は、近世式鉄筋

体的にはシンプルであるが、その中にそれぞれに装飾的な部分を有しているということは大きな特徴であろう。

そして大正屋呉店と農工銀行はともに交差点に向かって角地を入口とし、都市建築の一つの在り方を示している。大正屋呉店は角面をカーブさせ、農工銀行では直線的に2度折り曲げて対応させている。

このような傾向は広島市庁舎ではどの様になっていようか。まず、市庁舎でも、①縦長の窓割りは一貫していること、②階差でデザインを変えていること、その変え方は市庁舎では1～3階と4階の間となっていること、③ハンチは小規模であるが採用されていること、④耐震構造志向であること、広島市庁舎は同新築工事概要によると、「本市庁舎の構造は耐震耐火的の鉄筋コンクリート造にして…」とあるように耐震性が謳われていること、⑤抑制的ながら装飾を取り入れていること、即ち建築様式として「近世式『鉄筋コンクリート』装飾はオランダ式」（同工事概要）或いは「設計は増田建築事務所が担当、ヨーロッパ近代建築様式を取り入れオランダ・アムステルダム派の装飾を施した。」（鴻池組社史）とあるように簡素な中にもデザインを施していること、ただしやや傾向が異なるのは、迫り出した4階部分を支持するために面を取った柱を露出させて立ち上げ、上部でその柱頭をオーダーイメージで表現しており、そのためにやや彫りの深い建物となっていることである。増田設計の個々の建物との共通性として、①市庁舎と大正屋呉店とで2階へ上がる階段の4、5部分付近までが丸柱を巻き込むようにして外側に押し出されて広がって計画されていること（写真3と6）、②市庁舎の議事堂と大阪の精華小学校とでアーチで大空間を構成する手法が採用され（写真6写真1）、しかも外部からは箱形に見せていること、など細かい共通性がいくつか見出される。一般的には鉄筋コンクリート造建築設計に工夫を入れていること、デザイン面には「増田清風ぞ」という特徴は見えず、やや合理的精神が通底しており、その中に抑制的な装飾が施されているのが認められることができる。

6. 結び

本稿では、増田清という従来は隠れた存在であった建築家に着目して、その経歴と広島における作品活動を明らかにした。

増田清の大学時代に受けた強い影響は東京帝国大学工学部建築構造学専門の佐野利器教授からであり、構造的な関心が強かった。それは増田清の作品に見られるだけでなく、一連の学術論文にも表現されている。増田清の広島における建築活動を評価すると、1) 活動の拠点を大阪にした民間建築家増田清であるが、広島においても広島市役所により土木課の事務の嘱託を受けながら建築活動を行っていたことがあきらかになった。2) 広島における作品活動として、広島市庁舎、本川尋常小学校、大正屋呉服店、広島県農工銀行など、当時広島においてかなり重要な建築を設計する役割を果たしたことが明らかになった。3) それらの4つの作品は何れも鉄筋コンクリート造の建築として、構造的な配慮が強くなされ、耐震構造への志向性が高いという特徴がある。増田は地方都市広島に本格的な鉄筋コンクリート造建築を出現させた建築家である。ここでは触れなかったが、被爆したが比較的頑丈に残り、そのため戦後の復興を支える重要な役割を果たした。4) デザインには合理的精神が通底しており、その中に抑制的な装飾が施されているのが認められる。特に

広島県農工銀行建築の設計に当たって、建築雑誌にアメリカの銀行建築専門家の意見を紹介しており、その際に広島県農工銀行の平面図を掲載している。この建物で増田はアメリカ式の合理的銀行建築のあり方の具現を試みたと言える。これらは当時の広島に置いては革新的な建築であった。5) 増田清は日本近代建築史の大きな流れを左右する程の影響力を持った建築家ではなかったが、関西・広島という限定された地域においては大きな影響力を有した建築家であり、数多くの作品を残していることを評価したい。西澤泰彦氏も述べる¹⁾ように、今後このような地方における建築家の活動に関する研究の進展に依って日本近代建築史を総体としてよりの確に把握することが可能になると考えられる。

本稿では、増田清の経歴と活動、特に広島における建築活動を明らかにすることに主眼を置いた為、個々の作品分析や増田清の作風等について、多くふれることができなかった。また、構造の問題も、特に鉄筋コンクリート造建築の発達と関連して興味ある主題であるが、これらの点については、あらためて別稿に譲ることとおきたい。

【謝辞】

本研究に際しては、増田清氏の遺族増田坦氏、大阪府立今宮工業高等学校建築科教諭川島智生氏、堺市立工業高等学校教諭柴田正己氏から貴重な情報をいただいたこと、また広島市平和記念資料館による被爆建造物等総合記録書の調査メンバーとの共同調査による成果を含めていることと合わせて、謝意を表す次第である。

脚注：

1) 増田清に関連しては、坂本勝比古、「関西における建築家の職能」（日本建築学会編「近代日本建築学発達史」所収 P.2124）。柴田正己、「大阪建物ウォッチング NO.142 大阪市立精華小学校①」（平成3年12月1日付「大阪」）。川島智生「大阪市立小学校校舎の鉄筋コンクリート造の普及過程に関する研究」（平成6年度日本建築学会近畿支部研究報告集）。海野弘、「モダン・シティふたたび」（創元社、昭和62年）P.164-166。などの著述や研究論文において言及されているのが見られる程度である。

2) 大正呉服店の建築は平和記念公園の建設に伴い取り壊すかどうかの論議をよんだが、1957年3月に広島市が買収し、東部復興事務所として市の東部地域の復興の拠点となった。1982年9月には平和記念公園レストハウスとして整備され、公園の憩いの場となって、今もその役割を果たしている。その他広島市役所の建築は被爆後も補修され、市役所として使用されてきたが、85年に新庁舎が完成し、11月旧庁舎の地上部は撤去され、被爆時に配給課の倉庫となっていた玄関付近の地下室部分が改造されて旧庁舎資料展示室として保存されている。本川尋常高等学校は被爆後、補修されて校舎として使用されてきたが、1987年には撤去が決定されたが、その際、地下室のある位置をその1階部分とともに約400平方メートルが部分保存され1988年4月平和資料館として整備され、同年5月に開館し、今もそのまま使用されている。広島県農工銀行本店は1980年その役割を終え、解体された。

3) 研究の方法としては、可能な限り増田に関する資料を収集することにつぎすが、そのために例えば少しでも増田について触れた文献・資料を検索・収集すること、増田の遺族を捜し、連絡を取り、訪ねるなどして私的な資料を含めて収集することなどが必要である。今回、清水建設から旧大正屋呉服店に関する貴重な

資料が提供されるなど参考となった。増田清の遺族を探し、連絡を取り、訪れるなど資料の収集は第一著者が担当し、後の広島での作品や資料収集・整理まとめなどは2著者の共同の研究になる。

4) 増田自身による履歴書で7月卒業とされるが、別の資料では、6月卒業となっている場合がある。同級生に「日本の住宅」(岩波書店)を著し京都大学教授となった藤井厚二や建築音行学の先駆者たる堀越三郎がいるが、ともに既に物故されている。

5) 日本建築協会の会員名簿によると、大正11年発行のものには医科大学建築部、大正12年発行のものでは工学士の学位が付き、大阪府内務部勤務となり、住所は後に「大阪市外関町篠庭3の22」となる。

6) 「増田清建築事務所主」(大正13年版)から「増田建築事務所主」(大正14年版)、「建築設計書行、増田建築事務所」(昭和2年版)などと一定していない。

7) 坂本勝比古「関西における建築家の現能」(日本建築学会編「近代日本建築学発端史」所収、P.214)。坂本は「府直属の大阪医科大学建築事務所にて増田清も、大正13年に事務所を開いている。」と述べている。付図はPP.2160-2161。

8) 表1は遺族からの資料提供を基に東京大学工学部建築学科の同窓会組織である「木塚会名簿」、「日本建築協会の会員名簿」大正9年、大正13年版、日本建築学会編「近代日本建築学の発端史」、坂本勝比古の「関西における建築家の現能」と「付図・関西における建築家を巡る系譜」などの論文と調査の検討の上著者が作成した。

9) 最後の設計事務所の再開発は京都医科大学関係の病院、研究室、職員アパート、防衛高校の校舎やアパート、北摂学園の校舎、体育館等を設計している。

10) これだけの建物を設計したとなれば大規模な設計事務所と考えられるが、遺族の情報によれば、所員10人くらいの事務所ではなかったという。ただし当時では珍しいドラフターを備えていたという。日本建築協会名簿では前内文二郎が昭和4年より5年まで、仁木俊治が昭和5年から8年まで、増田建築事務所所員として名簿に残っているが、その後名簿から消え、所属が消えている。

11) 平成元年1月21日付夕刊フジに「大正建築美を再現、1億円をかけて改修・保存、三木楽器店」とした記事が掲載されている。この中で、このビルに因するエピソードとして、「汽笛一声新編を…『傑道唱歌』の出版元、「山田耕筰が昭和7年から11年まで、3階三木ホールで音楽教室を開いていた」など紹介されている。

12) ちなみに錦華小学校は昭和18年には空襲の危険を避けて築園薬屋となり、戦後直後は校舎が木小屋やパーマネント屋、理髪屋、写真屋などの業者が入居して営業する場所になっていたが、昭和23年に学校として復讐した。昭和26年に創立60周年記念式典、昭和46年に創立100周年記念式典が挙行されている。現校舎は、建設されて55年を経過して、平成6年度末で統合され廃校となった。

13) 川島智生、「大阪市立小学校校舎の鉄筋コンクリート造の普及過程に関する研究」(平成9年度日本建築学会近畿支部研究報告集)。川島智生、「大正期大正市の鉄筋コンクリート造小学校の成立と民間建築家の関与について」日本建築学会計画系論文集第469号、213-222、1996年11月。昭和2年の学区制度に際して、学区制に基づき建設されたのが鉄筋コンクリート造小学校で、その竣工が昭和3、4年にまで及んだというのである。

14) 柴田正己「大阪建物ウォッチング #0.142 大阪市立錦華小学校①」(平成3年12月1日付「大阪」)。柴田は「大阪府立医大病院隣の建築にあたって、鉄筋コンクリート造の無梁版構造を試みている。」と記述している。

15) 表1は増田清自身が書き残しているものを基に日本建築学会編「日本近代建築総覧」(技法堂出版)、近代建築画譜刊行会編・出版「近代建築画譜近畿編」、「建築の東京」などの論文と当時の新聞記事などを検討する上著者が補足作成した。

16) 海野弘「モダン・シテイふたび」(創元社、昭和52年)PP.164-166。

17) 増田が内務省に提出したのは「建築設計履歴書」と「御願」2枚に分けている。

「御願」には「私債従来主として鉄筋コンクリート建築工事の設計・監理・計算及鑑定業務に従事致し居候ゆへに御設計の建築工事を一般民間の建築家にも御依頼相成るやる預れ承り候。在求と充分の懇切と御意とを以て設計を致し居り候へ共特に貴省の御依頼御下命に接し候はば設計者としての信用をも増し得る事疑無き儀と存せられ候何卒北際御下命相願度別紙設計履歴書……。」の内容が書かれていた。

18) そのリストによれば本川町常高等小中学校は設計中とあるが、広島市庁舎は掲載されていない。

19) 清水建設は最近に成って大正屋具服店竣工当時の写真を見つけて、社内報に掲載した。本誌でもその複写を入手し利用している。

20) 「帝人の歩み②風雲に捲かれて」(同)P.51に「建築の設計は増田事務所が、広島工場引き続いて行い…」とあるが、「帝人の歩み①一粒の粟」(帝人株式会社発行、昭和43年)には広島工場の設計が増田事務所である記載はなく、広島工場の設計は大正8年でまだ増田事務所は開設されておらず、大正13年には安井建築事務所の安井武雄が帝人建築関係顧問に就任しており、増田は帝人の設計には関係していないと見るのが妥当であろう。

21) 社団法人東京建築協会編「主要建造物年表、保存版」東京建築協会発行、平成元年P.17。

22) 「広島市議会誌建築資料集I」(広島市議会編発行、昭和63年)P.936。なお、大森、渡辺についてはフルネームでないため確定できないものの、大森とは大森啓一(明治45年東京大学建築学科卒業)、渡辺について言えば後に稲屋デパート新館を設計した渡辺仁か、少し前に初池銀行広島支店を設計した渡辺節のいずれかと考えられる。

23) 大正13年12月12日付養徳日々新聞に依れば「佐藤市長各職委員、本紙等編事件解決(一)」の見出しで報じた中に、「広島市長佐藤信安は東京新橋に於いて市庁舎建築設計顧問人池田隆より供応を受けたこと…」という記述があるように、「池田隆との東京における会談事件」を第1の論点とし、他に養徳事件や福山水利借出頭に絡まる不正事件を主要な論点として佐藤市長を攻撃した。

24) 「新修広島市史第二巻政治史編」P.610。

25) 初池組「初池組社史」P.144。

26) 西澤泰彦「建築家中村貞実平の経歴と建築活動について」『日本建築学会計画系論文集』450号、1993年8月。

【写真の提供】: 写真1は川島智生所蔵。写真2は片岡完五蔵。写真3、写真4、写真5は清水建設広島支店提供。写真6、7は増田祖提供(増田清遺族)。写真8は「建築と社会」1930年11月号からの写しである。写真9は広島市公文書館提供。写真10は初池組広島支店提供。写真11は福嶋一男提供。

1999年2月10日原稿受理、1999年6月11日採用決定)